

ほんばこ

愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2026



10月かなづき(神無月)、しぐれづき時雨月、はつしもづき初霜月)

二十四節気

かんろ寒露 8日

露が冷たく感じられる頃のことです。空気が澄み、夜空がさえざえと月が明るむ季節です。

そうこう霜降 24日

朝夕にぐっと冷え込み、霜が降りる頃です。山野の葉が鮮やかに色づきます。

図書委員よりおすすめの本

書名：『神様のカルテ』 著者名：夏川 草介 出版社：小学館

この小説は、本庄病院で働く5年目の内科医（栗原一止）が、患者や職場の同僚、友人、そして妻とのかわりを通して、自分の生き方について考えていく物語です。

彼は、患者に対して行った医療行為やかけた言葉、良かれと思ってした自分の判断が、本当に適切だったのか、自分のエゴだったのではないかと、何度も悩み、後悔します。しかし、悩みや苦しみに押しつぶされることなく、周りの人たちに支えてもらいながら、自分自身で考え、より良い生き方を目指していきます。

この本の魅力は、登場人物たちの優しさあふれるやりとりや、美しい自然の描写です。落ち込んでいる主人公を、それぞれのやり方で励まそうとする周囲の人たちの姿には、読んでこちらまで元気づけられます。また、細かく描かれた風景からは、どこか温かさを感じることができるとともに、主人公の心情の変化も読み取ることができます。

図書室にも置いてありますので、一度手に取ってみてはどうですか？ （2年 図書委員）

「いまばり図書館ビブリオバトル」観覧希望者募集案内

毎年大人気、スペシャルイベントのお知らせです！

開催概要

日時：11月8日（日）14:30～16:00

会場：今治市立中央図書館

ゲスト：万城目学 先生

申込方法：10月上旬ごろ「今治市立図書館ホームページ」観覧申込開始

11月8日（日）、今治市立中央図書館にて、「高校生が推す！万城目学 ～ようこそ全力奇想天外～」ビブリオバトルが開催されます。

今回はゲストとして、第170回直木賞を受賞された作家の万城目学先生をお迎えします。高校生バトラーたちが万城目先生ご本人の目の前で、寸劇や歌、イラストなど個性豊かなパフォーマンスを交えながら作品の魅力を熱くプレゼンします。本校の生徒も刺激を受けること間違いなしのイベントです。万城目作品の「奇想天外」で魅力あふれる世界観を、高校生たちの熱気とともに体感してみませんか？10月上旬ごろより、今治市立図書館のホームページにて観覧希望者の申し込み受付が始まります。めったにないこの貴重なチャンスをどうぞお見逃しなく！ぜひご家族やご友人と足を運び、心躍る読書の秋を満喫しましょう。

10月27日は「文字・活字文化の日」

終戦まもない1947年（昭和22年）、まだ戦火の傷痕が至るところに残っている中で「読書の力によって、平和な文化国家を作ろう」という決意のもと、出版社・取次会社・書店と公共図書館、そして新聞・放送のマスコミ機関も加わって、11月17日から、第1回『読書週間』が開催されました。

そのときの反響はすばらしく、翌年の第2回からは期間も10月27日～11月9日（文化の日を中心にした2週間）と定められ、この運動は全国に広がっていきました。そして『読書週間』は、日本の国民的行事として定着し、日本は世界有数の「本を読む国民の国」になりました。

今、電子メディアの発達によって、世界の情報伝達の流れは、大きく変容しようとしています。しかし、その使い手が人間であるかぎり、その本体の人間性を育て、形作るのに、「本」が重要な役割を果たすことは変わりありません。

暮らしのスタイルに、人生設計のなかに、新しい感覚での「本とのつきあい方」をとりいれていきませんか。『読書週間』が始まる10月27日が、「文字・活字文化の日」に制定されました。よりいっそうの盛り上げりを、期待いたします。

（公益社団法人読書推進運動協議会「読書週間の歴史」より）

先生方よりおすすめの本

今月は、角常 匠 先生（理科）です。

書名『そして誰もいなくなった』

著者名：アガサ・クリスティ

出版社：早川書房

私はもともとミステリーが好きで、さまざまな作品を読んできました。そんな中、「世界的に有名なミステリーを読みたい」と思い、手に取ったのがアガサ・クリスティの『そして誰もいなくなった』です。本作は、私が初めて読んだアガサ・クリスティの作品でもあります。タイトルを聞いたことがある人は多いかもしれません。しかし、結末を知らない人には、ぜひ何の情報も入れずに読んでもらいたい一冊です。

物語の舞台は、外界から隔てられた孤島です。年齢も職業も異なる、互いに面識のない十人の男女が、正体不明の人物からの招待を受けて島に集められます。しかし、屋敷に招待主の姿はありません。やがて彼らは過去に犯した罪を次々と告発され、島に伝わる童謡になぞらえるように、一人、また一人と命を落としていきます。島から逃げることはできず、外部から誰かが侵入した形跡もない。つまり、犯人は残された者たちの中にいることになります。

この本の面白さは、ただ犯人を予想することだけではありません。登場人物を信じた直後に疑わしく感じたり、怪しいと思っていた人物の言葉に納得させられたりと、読み進めるたびに自分の推理が揺さぶられます。「今度こそ分かった」と仮説を立てても、新たな事実が明らかになるたびに、その仮説を考え直さなければなりません。そして迎えた結末は、私の予想を大きく裏切る衝撃的なものでした。読み終わった直後には、それまでの場面にどのような手掛かりが隠されていたのかを確かめるため、もう一度最初から読み返したいと思いました。

この読書体験をきっかけに、私はアガサ・クリスティの作品を次々と読むようになりました。どの作品にも、読者の思い込みを巧みに利用した仕掛けがあります。人は一度「この人が怪しい」「きっとこうなる」と考えると、その考えに合う情報ばかりに注目してしまいます。本作は、私たちがいかに先入観に左右されながら物事を見ているのかを実感させてくれました。

これは、理科の問題や実験に向き合うときにも通じるものがあります。まず仮説を立て、得られた結果と照らし合わせ、矛盾があれば考え直す。最初の予想に固執するのではなく、新たな事実を受け入れて自分の考えを更新することが大切です。推理小説を読むことは、作中に散りばめられた情報を集め、自分なりの仮説を組み立てる、一つの思考実験なのかもしれません。

皆さんは、犯人を見抜くことができるでしょうか。ぜひ登場人物たちと一緒に疑い、考え、推理しながら、この物語に挑戦してみてください。そして読み終わった後には、もう一度最初から読み返してみてください。一度目とはまったく違った物語が見えてくるはずです。

御協力いただき、本当にありがとうございました。みなさんもぜひ読んでみてください！